



TITLE:

附属図書館に望むこと

AUTHOR(S):

野木, 達夫

CITATION:

野木, 達夫. 附属図書館に望むこと. 静脩 1999, 臨時増刊号(1999)100周年記念: 37-37

ISSUE DATE:

1999-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37860>

RIGHT:

展 望

附属図書館に望むこと

野 木 達 夫

1998年春、電子図書館が立ち上がって間もない専門部会で意見交換があった際に、「ヴァーチャライブラリ(VL)に期待したい」と発言したところ、「図書室へ足を運べば、新しい出会いもあり、思索にもつながる、そういう従来型の図書室を大切にしたい」というご意見をいただいた。ここで少し補足をさせて貰う。VLは手元の端末で目的の図書室に出かけて本を探す疑似体験ができ、必要資料を借りたりコピーしたりの手続きにも連動するといったイメージで述べた。学内各所の図書室がいつでも開け、開架図書を辿り必要なものを取り出してページを繰ることもできる。画面には図書室にいて見る書架などの映像がそのまま登場する。これなら、新たな出会いも思索も期待できそう。

VLはなじみの図書室をよく再現していることに加え、実体験で十分にイメージが焼き付いていることが望ましい。現場は長期間配架状態がほぼ同じままに保たれ、幾度も足を運んで何がどこあたりにあるかの見当もつく必要がある。さもないと画面で辿ることは不便である。尤も検索システムと連動しているので、書誌事項がわかっている必要書類なり、本そのものにアクセスできるが、いまは図書室であれこれ考えながら探っていく疑似体験について述べている。身近な研究室図書室ではすべての棚をみても大した時間はかからないので、何かを思い立ったときにひたすら本の背をみて回ることもある。資料の内容も含め全体像がある程度できあがっていて、一番の相談相手である。部局の図書室についても利用するほどに「自分にとっての図書室」ができ上がる。そのうえでのVLであれば便利なものになる。

各人が図書室イメージをもつにも、なじみのある書物とともに新しい出会いを期待させる魅力に富んだ図書室であることが要である。果たして附属図書館の開架部分(約10万冊)はそれに応えてくれるであろうか。主に学生諸君が啓発され、親しめるような内容になっているであ

ろうか。附属図書館も随分整備されてきたが、その顔ともいえるべき開架書棚の内容と空間にはもっと工夫があってもよい。最近では学長裁量経費などを得て、学生からの希望を聞いたり、選書委員が定期的にカタログから選んだり、年に一度書店に出向いて選書するなどして学生用図書の充実化がはかられている。しかし、現状を踏まえた選書方針の検討がないままに補充する感が拭えない。ここは、司書の方々に本領発揮いただくことを期待するとともに、幸い多様な専門分野にわたる選書委員を抱える大学であり、両者が連携協力すれば、もっとすばらしいものに改変できるのではなかろうか。新旧の分類によって書架が分離されていることも利用者にすれば好ましくない。書架の傍で本を涉猟し、また読みふけることもできるようなスペース設計についても工夫がほしい。

ついでながらVLの夢を膨らませよう。パブリック性の強い図書室では、多様な要望に対処できるように、標準的な分類に則り多量の書物が一様に平板的に並べられることは当然である。対照的に全くプライベートな書棚では自分に気に入った書物を思いのままに並べる。数は少なくとも互いに関係しながら所有者に語りかけてくれる。その役も演じるプライベートなVLをパブリックなVLから借りてきて作り上げることも展望したい。それは所有者の歩みとともに拡大する高次元空間を構成する。単なる総和情報レベルを越えた高い知識を生む可能性が孕まれている。空間表現設計も各人思いのままである。多年積み上げられた経験者のVL自体を借りることも可能。そんなVLの実現のための環境整備とソフトウェア開発は、技術的にはそれほど困難ではなかろう。図書情報のデジタル化が前提になることは云うまでもない。それでも依然大事なことは、VLの基盤となるパブリック図書室の充実化であることに変わりはない。

(のぎ たつお：大学院情報学研究科教授)